

や修道者にとって、信徒にゆだねることのできる役割を信徒に任せることは、決してみずからの役割が軽減されることを意味するのではなく、より重い新たな責任を担い、これまでも増して献身的な奉仕が必要とされるということである。

### c. 養成の推進

信徒奉仕職が真にキリストの奉仕職を受け継ぐものとなるためには、直接キリストの言葉に耳を傾けるとともに、教会をとおして示される具体的な呼びかけにも注意を払わなければならない。前二項(a. 意識の刷新、b. 信徒司祭間の緊密な協力)に示されたように、新しい教会理解に基づく信徒奉仕職は、これまでの教会の奉仕のあり方を大きく変えるものであり、また信徒と司祭や修道者との協力関係において成り立つものなので、キリストの呼びかけにふさわしく応えていくために、信徒はもちろんのこと、司祭や修道者も含めて新たに養成されていく必要がある。

そのような養成のために留意すべき事柄として、前々項で求められたような新たな意識の育成とともに、次の諸点が考えられる。

- ① 信徒は、日々の生活で出会うすべての出来事を、信仰を通して見ることのできる目を持つ。
- ② 信徒は、自分が派遣されている場と自分に与えられているカリスマを正しく理解し、見きわめ、活かしていく力を身につける。
- ③ 司祭や修道者は、信徒を含む社会の人々の現実に向け、その声に耳を傾け、彼らの耳に届くメッセージを身につける。
- ④ 司祭や修道者は、人々に教え指示するリーダーシップよりも、人々を必要に応じて支え、人々の働きを励ます奉仕を重視し、そのような働き方を身につける。

## 2) 教区全体の動き

大阪教区は、阪神淡路大震災を契機として教区「新生計画」を策定し、その推進に努めてきた。その実施要領である『新生の明日を求めて』では、今後求めていく教会像として五つのポイントを挙げている(P47~57)。そのいずれもが信徒奉仕職と深い関係を持つものであるが、中でも特に「共同責任を担い合い、協働する教会」「司祭・修道者との協力を重視しながら、信徒の役割と責任を前面に出す教会」は、直接つながるものである。

また、「新生計画」の具体的な推進体制として2002年4月より教区全体で開始されたブロック化の取り組みでは、すべてのブロックにおいて「共同宣教司牧」か「協力宣教司牧」の体制がとられ、司祭間の協力のみならず信徒・修道者との協力関係が不可欠なものとなってきている。

しかしこうした歩みの中で、さまざまな形態の養成が継続され、組織的には信徒奉仕職を必須条件とする体制が作り上げられたにもかかわらず、新たな体制の中で役割を果たせる人材が十分に養成されるまでにいたっていないのも現実であろう。この体制を有効に機能させられるよう、さらに組織面での整備を図るとともに、前項に掲げた留意すべき諸点に基づいた養成を推進していかなければならない。